In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	一つの覚え書
Author	海老原, 晃
Citation	人文研究. 22 巻 6 号, p.520-540.
Issue Date	1971
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	溝邊龍雄教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

一つの覚え書

海老原　晃

昭和45年

§ 某月某日

忘れないうちに大急ぎでメモをして置く。

この一カ月位の間心から離れない衝動がある。それは Menge-Bibel と Zink-Bibel とを恰度プレパラートでも作るようにして，比較対照してみたいという考えなのである。

Menge-Bibel のことを知ったのは Tschirch: 1200 Jahre dt. Spr. を読んだ時のことであるから，同書の出版された1955年以降のことである。それが正確に何年に当るのかは今思い出せないが，池田に住んでいた頃に間違いないような気がする。京大に行った帰りに至成堂に廻ってみたら不思議な位簡単に Menge-Bibel が手に入った。その時ついでに何気なく Zürcher Bibel も買った。その直後にF君に Menge-Bibel を知っているかと尋ねたら知らないとのことに奇異な感じがしたことを覚えている。Zürcher Bibel はそれがどんなものかも知らずに買ったのであって，これが Luther 訳と違うものらしいことを知ったのは最近のことである。

Menge-Bibel では Menge が何故新訳を試みたかを書いた Beiheft に感動した。そしてその部分を教科書にしたいと思って郁文堂に申入れたが断られた。その後N君に相談してその Beiheft を託して置いたが，今年の2月に延長授業をすることが決まった時 Text に使ってみたいと思ってN君から急ぎ返送して貰ったが，途中で考えが変って Text には Bergengruen の Wettstreit der Großmut を使ってしまった。しかしいつか Text に使いたいという考えは今も変らない。その準備はしてある。

さて，Sammlung Göschen の Bd. 915 Sperber-Polenz: Geschichte d. dt. Spr. 1968 のことはいつか阪神独文学会の会誌に書評を頼まれた時に一寸触れたけれど，旧版に比べるとずっといい本である。その最後にS. 125—127にかけて Textproben があって，Lukas の2, 4—6の部分が 1. Gotisch 2. Ahd. 3.

spätes Mhd. 4. Frhnhd. (Luther, 1522) 5. Nhd. 18. Jh. (Zinzendorf, 1739) 6. Nhd. Anfang 20. Jh. (Menge, 1926) 7. Nhd. Mitte 20. Jh. (Zink, Womit wir leben können, 1963) 8. Mnd. 9. Nnd. と対照して揚げてある。この部分をゼロックスで学生に与えてみたのは既に3回か4回に達している。Zink の Womit wir leben können を入手したのは昨年の夏頃だったかと思う。そして Zink には別にA.T.もN.T.もちゃんとあることをその時に知って，すぐに注文してA.T.とN.T.を入手したのは去年の暮か今年に入ってかのことである。Polenz がどうして Zink の引用をする時に Womit wir leben können を使ってN.T.を使わなかったのかは不思議である。Womit wir leben können という題名が何を意味するのかは同書を入手してはじめて分るのであって，扉に Das Wichtigste aus der Bibel in der Sprache unserer Zeit / Für jeden Tag des Jahres ausgewählt und neu übersetzt von Jörg Zink とある様に1月1日から12月31日までの365日分，いや2月29日の分もあるから，366ページに分けて聖書の色々な箇所から適当な言葉が選び出されているのである。従ってルカ伝2章4節を探すためには巻末の索引に頼らなければならない。又，2章は全体で51節あるのに訳出されている部分は20節にすぎない。63年の時点では Womit wir leben können のみが出版されていてN.T.はその後に出版されたのかも知れないが，そしてその公算は大きいのだけれども，Polenz の6版が出た68年には完訳のN.T.が出ているのだから，その時点でもなお Womit wir leben können に固執する理由は一体何なのであろうか？

それはそれとして，考えを進めて行く上では Zink のN.T.の存在を肯定してかからないとどうも工合が悪い。さて，もし Polenz の選定が正しいとすれば Menge と Zink との間には20世紀初頭のドイツ語と現在の20世紀中葉のドイツ語との間にどういう変化が生じたかを確かめる手掛りがある筈である。そして Polenz の選定には一応疑いを持たないことを前提として，やり方を考えてみると，何よりまず Tschirch のやり方に習って一節一節毎に委しい並列表を作ってみて検討する以外の方法はない。そしてどうせやるなら徹底的にやる方がいい。それにはN.T.のどこにまず手をつけるのが好都合かを考えてみた。最初はN.T.の冒頭にあるマタイ伝からやり始めようかと思った。しかしまた考えてみると Polenz はルカ伝の一部を対照しているのだから，Polenz を信用するなら同じルカ伝の方がよさそうである。また分量としてもルカ伝の方がマタイ伝より短いから一応の結論を出すのには適当である。岩波文庫の新約聖書——奥付を見る

と昭和38年9月16日第一刷発行，39年11月20日第四刷発行とある——をいつ頃買ったか覚えていない。市大生協の紙でカバーしてある所を見ると会議の際に読もうと思って買ったのかも知れない。それを取り出して解説の部分を読んでみたら，三伝の資料を比較した箇所が399ページにあって，三伝それぞれの特別資料は別にすると，ルカ伝にはマタイ伝とマルコ伝とにわたって共通の部分があることが確かめられた。こうなるとルカ伝を第一に選んでみることが無意味ではなさそうである。角川文庫に „聖書の読み方“ という本があるのを牧野のスーパー・マーケットの前の小さな本屋で見つけて，94ページ以下のルカ伝の解説を見たら，ルカ伝の特徴はルナンの言によれば最も文学的であることにありとしてある。益々好都合である。ルカが医師であったということにも関心が惹かれた。

Menge-Bibel と Zink-Bibel とをルカ伝を中心にして比較してみることにして，その異同が確かめられてからどう整理し結論づけるかを考えてみる。もし両者をN.T.全体にわたって行ってみて統計的な結論が出された場合，それを以て直ちに今世紀初頭のドイツ語と半ばのドイツ語との相違であるとまでは言わないにしても，とにかく一応の結論が出されることには疑いない。しかしルカ伝だけが差し当り比較の対象となっているのでは結論を出しにくい。Menge と Zink との個人的な差であるのか時代的な差であるのか，或は両方の混合したものであるのか，それを何によって判別すればいいのか，それともそんなことは不可能であるのか，等々さまざまな疑問が生じて来る。そうするともし Menge 側に味方する資料と Zink 側に味方する資料とがあると仮定して，それを傍証することが出来れば，両者の相違を単に個人的な相違にのみ帰さないで処置出来るから好都合である。一方の資料をM群とし他方の資料をZ群とする。両群についてはそれぞれ一つの心積りがあった。そのいきさつを記す。

昨年の夏のことである。大学は紛争の真最中で甚だしく面白くない。何かの機会で久し振りに阪急百貨店の洋書部をのぞいてみたら Good News for Modern Man という挿絵入りの本があった。手に取ってみると The New Testament in Today's English Version という副題があってやさしい英語で書いてある。挿絵に心を惹かれて求めて読み出してみると仲々に面白い。その後間もなく又阪急百貨店の洋書部に寄ってみた。なんでもその頃は杉本町では危険で全然会合出来ないため，北のヤンマーディーゼルにあるドイツ文庫などによく集まったりしたから，その帰りだった筈である。何か面白い本はないかと書棚を見ていたら Gute Nachrichten für Sie という本があった。手にとってみるとNT 68 Die Berichte

Briefe und Zeugnisse des Neuen Testaments in heutigem Deutsch とありGood News for Modern Man の独訳であることが分った。しかし挿絵は違っていてドイツ人好みなのかも知れないが，自分の好みには合わない。それはともかく，この副題にある in heutigem Deutsch という表現は二重の意味で興味を惹いた。つまり現代ドイツ語の実体を知る手掛りになるかも知れないということと，im heutigen Deutsch となっていないことがそれである。で，その時はまだ Zink-Bibel を手に入れてなかったから後ちに利用することがあるとは考えずにただ例の癖で買って来たのであるが，今になるとこれをZ群に入れることが考えられるのである。但し無条件にするわけにはいかない。というのは Gute Nachrichten für Sie は Good News for Modern Man を訳したと断ってあるから，仮りに Bibel の基準となる正典があるとして——そしてこの正典なるものがあるかどうかについては後ちに論じなければならない問題ではあるが，今はただ正典があるとして話を進める——それからの直接訳という風に見なせないかも知れない。もっとも Good News にしても Gute Nachrichten にしてもそれぞれの序文を読んでみると正典を離れて書き改められたものではないことが明らかであるし，Gute Nachrichten も Good News の機械的な対訳でもないらしいから，それ程気にしなくてもいいかも知れない。NT 68 という表題を掲げているのは68年度ということを強調したいからで，その意味では飽迄も68年に於けるドイツ語の聖書ということを主張しているのであろう。してみるとZ群の一書として極めて適切であるかも知れない。

M群については Menge-Bibel が1926年という年数で Tschirch の書物の中に入れてあることを基準の一つと考える。前出の Zürcher Bibel で手元にあるものはその扉の裏側に diese Zürcher-Bibel, die auf die Reformation Zwinglis zurückgeht, wurde in den Jahren 1906 bis 1931 im Auftrag der Kirchensynode nach dem Grundtext aufs neue übersetzt とある。この 1906—1931 という年数はほぼ Menge-Bibel に匹敵するものであることは断るまでもない。ただ問題なのは Menge-Bibel が Luther によっているのに Zürcher Bibel が Zwingli によっている点である。このことは Bibel の正典問題にも関わりをもつわけであるが，しかし純粋に語学的な面のみを考察の中心とするなら両者との間に仮りに相違があるにしても，1926年前後のドイツ語という点では一致するものがあるかも知れない。

3月27日久し振りに神戸に行く機会があり，元町の丸善に寄ったら Fischer

Bücherei 中に Claus Westermann : Abriß der Bibelkunde があるのを見つけた。1961年に出たものを68年に Fischer Bücherei に入れたものらしい。その序文に Die Texte sind gewöhnlich nach der Zürcher Bibel zitiert, manche nach Luthers manche nach eigener Übersetzung とあることから Zürcher Bibel を M群に加えることに不安を感じなくなった。

3月23日京大教養部の図書室で Fischer Bücherei 中のN.T. と古いポケット判の N.T. とを発見した。Fischer Bücherei に N.T. があることは知らなかった。ギリシャ語の原典から訳した現代語訳である。Z群の資料に加えることが出来る。それのルカ伝の部分をゼロックスにとる時に余白が残るからついでにポケット判の在来の N.T. の同じ部分も写すことにしてK君の好意で3月30日に受取ることが出来た。ポケット判の N.T. は三高の蔵書印のある古いもので所謂 Luther-Bibel の流れを汲むものであるが，勿論 Nhd. になおしてある。私蔵の Die Heilige Schrift は昔福本書院で買ったもの。Großoktav-Ausgabe であるから大きすぎて不便であるからポケット判を手元に置きたかったのと，私蔵のものよりも古いからである。私蔵のものは1935年の文字がある。nach der dt. Übersetzung D. Martin Luthers/Neu durchgesehen nach dem vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text というサブタイトルを考えてみると Luther-Bibel は再三にわたって手が加えられているに違いない。この系統のものをドイツ語の聖書の基本的なものと考えるとして，それが毎回どれ位の年月毎にどういう手順で改訂されたものか，その間の事情をどう調べれば分るものか一寸想像が出来ない。勿論分っている人に聞いてみればきっとなんでもないことだろうけれど，余り明白なことすぎて何を見ても見つかりそうにない様な気がする。がともかくこの系統のものが古い方のドイツ語を代表するものの一つと考えることはそれ程見当違いではあるまいから，M群の傍証資料とする。

そこで整理して示せば Menge-Bibel の側には Zürcher Bibel と改訂された Luther Bibel を置き，Zink-Bibel の側には Fischer Bücherei 版と Gute Nachrichten とを置く。そして中心はどこまでも Menge と Zink とを一対一で比較し，その異同を確かめ，M群とZ群との資料で傍証しながら作業を進め，ルカ伝全体にわたってどういう結論が出せるものか出せないものかを検討しようというのである。

§ 某 月 某 日［前項の翌日に］

聖書の正典についてどう考えるべきかということを知るために白水社のクセジュ文庫中の „旧約聖書“ と „新約聖書‘ とを買った。これは3月19日松坂屋の書籍売場で見つけたもの。関西ではクセジュ文庫を置いている店は少ない。この二冊を読むことですくなくとも新約の正典については余り心配しなくてもいい様な気がしだした。中央公論社の „世界の名著“ 中の „聖書“ は前田護郎さんの訳である。簡単に買えると思っていたのにいざとなると仲々見つからない。それでも4月に入ってやっと見つけた。東京に居れば前田さんに色々教えて貰えるのに，手紙を出すのではじれったくてどうにもならず，残念に思うことが少くない。3月30日に河原町三条のカトリック教会の地下にある本屋で，Herder 版の Die Heilige Schrift des Neuen Bundes というのを見つけた。扉の裏を見ると Jerusalemer Bibel というのを底本にして独訳したものと断ってある。Jerusalemer Bibel は1956年に Paris で出版されたものらしい。Herder 版がどういう意味を持つかはよく分らない。

3月26日の夕方に本町の竹葉亭でM君H君と三人で送別会をやった帰りに久し振りに心斎橋に行き，丸山鳳林堂に寄って見たら，英語改訂標準訳と日本語口語訳対照新約聖書というのを見つけて買った。Good News のことを考えるためには普通の英語の聖書が欲しいのであった。Penguin Books で The New English Bible New Testament を買ったのは去年のことだ。しかしこれは新訳だから在来のものを知るためには何か簡単なものがあったらと思っていたのである。近頃 New English Bible が改めて出版されているが，どうもペンギン版を若干改訂したものであるらしい。仲々定本をきめることは難しいものだ。一考に値いする。

§ 某 月 某 日［前項の二日後に］

新学年に入って一回目の委員会の帰りに淀屋橋のトッパンに寄ったらクセジュ文庫の英語史が出ていて入手。その133ページ以下第5部資料　第1章聖書の英語訳の部分は大いに参考になった。マルコ伝第2章1—4の箇所はイエルサレムの聖書（Bible de Jérusalem, Pari 1955）を基準にして9世紀のものと1611年の Authorized Version と1961年の New English Bible とを対照し，それに注釈が加えてある。してみるとこの間から考えていたやり方が決して無意味でない証拠

だと言えそうである。又，Herder 版のこともやや見当がついた。但し Herder 版によれば La Sainte Bible は Paris 1956 となっている。又クセジュ文庫でイエルサレムの聖書の引用を揚げたあとで，日本聖書協会の口語新訳聖書によるとして訳文を掲げているのは気に入らない。日英対訳の聖書では基準になっているものはイエサレムの聖書ではない筈だ。どうもお粗末である。

9日に京大に行った帰りに久し振りに至成堂に行ってみたら希・羅対照の新約があったから買って帰って Tschirch の対照になっている部分と比較してみたら同じ原典であるらしい。従って正典に動かぬものがあると推定することはまあまあ問題はなさそうである。

所で至成堂で Stuttgarter Bibelanstalt が出している最新版の Bibel も買った。nach der dt. Übersetzung Martin Luthers とあるからこれがM群の伝統的なものというわけであるが，新約の部分は1956年に手を入れたものであるからこれをどう処理すべきか考えなければならない。Lukas の冒頭の sintemal という語は nachdem となっている。sintemal が nachdem となったのは一体いつ頃からなのか，1956年が最初かどうか確かめてみなければならない。一寸大変である。しかし全体としては古風な所が依然として残っている感じである。Anhang の部分に落丁があるような気がする。いや，確かに落丁ありと帰宅して調べた時には思ったのである。

所が，今日阪急に寄ってみて，同じものと思えるものがあったので，カバーの紙に面白い所があったし，落丁もないので買って帰って至成堂で昨日買ったものと比較してみると，少々分らなくなって来た。至成堂のは1000円で阪急のは1120円，至成堂のは hergestellt 1969 とあるのに阪急のは hergestellt 1968 とある。前者の Anhang は23ページ，後者のは54ページ，しかしそれだからといって無下に前者に落丁ありとは断じられないのは，S．23の裏側に Landkarten 云々の印刷があることである。扉の裏に siehe Seite 47 im Anhang とある所からすれば落丁と認めざるを得ないけれど——それにこの説明は68年版を見れば納得出来るものだけれど——Anhang の印刷の工合が68年版と69年版とでは異なっているし，又地図の附け方も異なっている。どうも一概に落丁とばかりは決められない様な気もするのである。Lukas 1，7の最後が wohlbe-betagt となっているのは両版とも同じ。これは完全な誤植であろう。私蔵の35年版はwohl betagt と分

けて正しく書いてある。どうも厄介なことが生じたもので，心配していたことが実現して来た感じだ。一所懸命に異同を調べてみてもこんなつまらぬ誤りがあるのでは話しにならない。

阪急でのもう一つの収獲は英訳の Jerusalem Bible を見つけたこと。旧・新一冊のもで2000円なので買うのをやめたけれど，買うべきであったかも知れない。Jerusalemer Bibel の疑問が少しづつ晴れて来る。

まあ色々なことを忘れないうちに書いて置こうと思ったのは，こんな風に次ぎ次ぎと色々な疑問が生じては消えて行く過程に一種の面白さを感じもするからである。9日に京大で Bibel-Lexikon を見たら Bibel-Übersetzung の項に有益なことが書かれているのを発見した。段々に色々なことが分って来る。勿論その一方では更に疑問も深まってはくるが。しかしそれはともかく，大体まあ以上の事々位を前提として，今後は作業を始めてみるべきであろう。

§ 某　月　某　日［前項より二カ月後に］

大失敗である。なんたる迂濶さぞやと地団駄を踏む思いである。考えてみると，数年前にはじめて Menge-Bibel を入手した時，そして前にも書いた様に Beiheft に感動した時，同書の Nachwort zur elften Auflage で Menge が 1939 年の1月に没する直前までその著に絶えず手を入れていたことを読んで更に感動を深めた，そのことをすっかり忘れてしまっていたのだ。もしそれを思い出していたら26年の初版の Menge-Bibel ——それを Tschirch も Polenz も引用しているわけだが——と手元の61年に出版されている11版の Menge-Bibel との相違について確かめてみる位の配慮は当然あった筈である。それをしなかった迂濶さには若干の理由もないわけではない。要するに聖書というものに何か動かぬもの，といっても何も深刻な意味でいうのではない，やたらに変動はしない辞句というか文言というか，そういうものがある筈だという大前提が暗々裡に考えられていたからである。だからこそ新約の正典について考えても見たのだ。動かぬ原点があって，それがある時代ではこう表現され，他の時代ではああ表現されると考えることによって，はじめて今度の作業は意味を持って来る筈である。だから若干の辞句の修正については問題にしなくてもよいと思っていた。しかしその辞句の修正が限度を超えて行われているとなると，中心課題が言語的なものであるだけ

に，無視するわけにはいかないのである。

Menge と Zink とをどう対照するかについて何度か試行錯誤を繰り返えした後で，一行毎に両者をタイプで並べて打つことにした。まず Menge を赤字で一行打ったら，それと同じ部分の Zink を黒字で打つというやり方である。随分手間のかかる面倒なやり方だけど，結局はこの方が利用価値が大きいと考えたのである。学校が始まったから仕事をする時間が仲々見つからない。昔だったら気になることが出て来たら学校を休んででもやったものだけれど，近頃はそれ程の熱意もなくなって，精励恪勤の教師になり下っているから仕事は遅々として進まない。それでもルカ伝の2章の終りまでを仕上げた。Menge はルカ伝全体を6部に分けている。その第1部に当る部分までで一応まとまった全体として扱えるに足ると考えた。そこで打ち誤りを訂正するために，同じ原文と対照する位なら Tschirch で引用されている部分と比較検討する方がいいと考えて，やって見たら，とんでもない事実にぶち当ったのである。各節毎に違いが見つかるのだ。愕然とした。プレパラートの入った箱を取り落としてガラスを粉々にしてしまった思いである。なんたることぞ！

それが一昨日のことである。昨日，今日と色々考えてみるがどうもうまい善後策が見つからない。折角やり出したんだからこの侭作業を続けようかとも思う。26年だろうが39年だろうがそんなことは構わないと強弁してみるが，Tschirch だって Polenz だってそんなことは分っていた筈だから，それでもなお26年の初版を取り上げているという事実を無視するわけには到底行きそうにない。だとすれば初版を入手する方法を考えなければならないが，可能かどうか考えてみると，どうも悲観的である。本が手に入らないとなると，次に考えるべきことは，せめてルカ伝の部分だけでもマイクロフィルムかゼロックスで写して貰うことである。これはドイツの何処かに頼めば可能であるような気がする。しかしその現物がどこの図書館にあるものか，またどういう経路で手順で頼めばいいものか見当もつかない。Menge でひどい目に逢ったから念には念を入れて Zink の方も当ってみるとこれ亦問題が生じて来た。Polenz の引用を手元の Womit wir leben können と比較してみると違うのである。1963年の初版と69年の12版とでは違っていて，但し，それでいながら Zink-Bibel の69年の5版とは同じである。ひどく入り組んだことになって来た。しかしこの方は底本を Zink の N.T. にせざるを

得ないからそれ程迷わずにすむけれど，矢張り心の片隅に引っかかるものが残る。

いっそのことみんな放り出してしまおうかとも思う。もともと聖書のことなどこれ迄一度も考えてみたことがなかったのだから，今急に何かやり出そうとしても分らないことだらけである。おまけに聖書学の方は何千年の歴史を持ちぼう大な大系がちゃんと樹立されているのだから門外漢が一寸やそっと首を突込んだとてどうなるわけのものでもない。専門家の目からみれば，自分が右往左往している有様など笑止千万なことであろう。おまけに聖書をただ言語資料の見本として扱おうというのだから罰当りも甚だしいわけだ。しかしその一方では現代ドイツ語とは如何なるものであるかという永年持ち続けた疑問がある。それを解明する手掛りの一つにはどうしても今試みようと考えている方法で片付けるより適切なやり方はなさそうだという感じが否めない。ある特定の作家の特定の作品を材料にしてやるよりは確実性が高いと考える。Tschirch なり Polenz なりが試みていること自体が立派な根拠であるだろう。自分はそれをもっと徹底した拡張した形でやってみようと思っているのである。必ずしも成功の確信があるわけではないけれど，二三のヒントを指摘するというのではなく大々的にやってみたいのである。折角やり出した以上は，とにもかくにも26年の初版の Menge-Bibel を探すことから始めるより仕方はない。それがどうしても見つからなければ，それから先きのやり方は又考えることにして，明日からは元気を出して心当りの誰彼に相談を持ちかけてみようと思う。

§ 某 月 某 日［前項より一カ月後に］

6月末の学会に上京した機会に本探しを試みた。小池辰雄さんに電話できいてみたが駄目である。26年頃 Menge-Bibel を買ったであろう年齢を考えてみて当ったのだけれど小池さんが駄目となるとどうも悲観的である。日本橋の丸善，銀座の教文館と聖書協会，本郷の福本書院，四谷のエンデルレ，神保町の信愛書房と走り廻って役に立ちそうな色々な版の聖書や参考書を買った。とうとうお金が足りなくなって借金して離京した。本は全部一纏めにしてN君に送って貰うことにした。丸善で Polenz の Geschichte d. dt. Spr. 7. Aufl. 1970 を買った。6版までは Sperber-Polenz となっていたのが7版からは Polenz だけの名となり，Textproben の所は前出の 9. Nnd. に続いて 10. Niederländisch (1968) 11.

Afrikans (1967) 12. Jiddisch (1949) と益々手が拡げてある。こうなると意地でも26年版の Menge-Bibel が欲しい。

この一カ月の探書の成果はさっぱりである。副産物はM君から Reclam の N. T. を貸して貰ったこと位い。一縷の望みはT君がドイツの大学の図書館でルカ伝の部分だけゼロックスで写して貰えるかも知れないという情報だけだけれど，これはT君が9月に帰国する時でなければ手に入らない。又，現物を自分の目で確かめない限り安心出来ないという心境なのはあつものに懲りてなますを吹くというわけか。

東京から送られた本の小包を開いて整理して，色々な版の聖書を比較しているうちに，最初に考えたM群の資料とZ群の資料という分類の仕方はどうもうまく行きそうになくなった。そんな簡単な仕別けが出来るような代物ではなさそうである。旧教の聖書と新教の聖書ということも考える必要がありそうだ。そうなると日本語訳の場合についてもこのファクターを考えなければならない。更に，近頃のことだけれど講談社から敷衍訳と称して「聖書の世界」全6巻が出版されている。第一回の配本は5月で第5巻新約Ⅰだった。当然買ってはみたが，この敷衍訳という言葉が気になって仕方がない。文語訳とか口語訳とか現代語訳とかそれからこの敷衍訳とか，まあそういった物を並列してこれが現在の日本語でございという風にやられるとしたら我々はどう感じるだろうか。今，自分のやろうとしていることはそれのドイツ版というわけなのか。日本語の場合はひどくつまらないものの様な気がするけれどドイツ語の場合はそうでないのか。もし両者の間に相違があるなら，それは何故なのだろう。まあそんな色々な疑問が夏雲の如く湧いては崩れ，消え去って行くのを流れに任せて思いに耽けるのである。

T君の帰国まで作業は一時中止である。仕方がないから今まで集めた色々な版の聖書から同一の箇所を並べてみることにする。Polenz にならってルカ伝2章4—6節である。そして簡単な説明をそれぞれに附記して置く。どういうわけか聖書には出版年数が明記されていないものが多い。しかし推定出来る場合もあるからなるたけ凡その見当はつけて置くこととする。なお念のために同じ箇所を日本語訳で示せば以下の通り：

イ）日本聖書刊行会本，新改訳新約聖書　（昭和45年）

「ヨセフもガリラヤの町ナザレから，ユダヤのベツレヘムという町に上って行った。彼は，ダビデの家系であり血筋でもあったので，身重になっているいいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。ところが，彼らがそこにいる間に，マリヤは月が満ちて，」

ロ）ドン・ボスコ社本，新約聖書　（1969年）

「ヨゼフはダヴィドの家系でありその血統なので，すでに懐妊していた妻のマリアと共に，名を届けるために，ガリラヤのナザレトの町からユダヤのダヴィドの町ベトレヘムに来た。そこにいる間に，マリアは，産期みちて，」

ハ）講談社本，聖書の世界　第5巻新約Ⅰ　（1970年）

「ヨセフもすでに身重になっていた許嫁の妻マリアムと共に登録するために，ガリラヤ地方のナザレという町を出て，ユダヤ地方のベツレヘムと呼ばれる町——これはいにしえのダビデ王の出身地であるが——におもむいた。ヨセフはダビデの家系に属していたからである。こうして彼らはベツレヘムに行ったのであるが，その時，彼女は月満ちて，」

ニ）米国聖書協会本（昭和8年）

「ヨセフもダビデの家系また血統なれば，既に孕める許嫁の妻のマリヤとともに，戸籍に著かんとて，ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り，ダビデの町ベツレヘムという処に到りぬ。此処に居るほどに，マリヤ月満ちて，」

（以上何れも振仮名あれど省略す）

（Ⅰ）Menge と Zink：

［A］（Hermann Menge, 1926）

So zog denn auch Joseph aus Galiläa aus der Stadt Nazareth nach Judäa hinauf nach der Stadt Davids mit Namen Bethlehem, weil er aus Davids Haus und Geschlecht stammte, um sich daselbst mit Maria, seinem jungen Weibe, die guter Hoffnung war, eintragen zu lassen. Während ihres dortigen Aufenthalts kam für Maria die Zeit ihrer Niederkunft,

Menge-Bibel の初版本（1926）は入手出来ないからこの引用文は Sperber-Polenz の Geschichte d. dt. Spr. 6. Aufl. S. 126 に基くもの。但しTschirch：1200 Jahre Dt. Spr. によって確かめることは出来る。

［B］（Hermann Menge, Die Heilige Schrift 11. Aufl. 1961）

So zog denn auch Joseph von Galiläa aus der Stadt Nazareth hinauf nach der Stadt Davids, die Bethlehem heißt, weil er aus Davids Hause und Geschlecht stammte, um sich daselbst mit Maria, seiner jungen Ehefrau, die guter Hoffnung war, einschätzen zu lassen. Während ihres dortigen Aufenthalts kam aber für Maria die Stunde ihrer Niederkunft,

発行所は Württembergische Bibelanstalt. Stuttgart。これが前出の［A］と可成り相違している点が問題になるのである。

［C］（Jörg Zink, Womit wir leben können, das Wichtigste aus der Bibel in der Sprache unserer Zeit, 1963）

Da wanderte auch Joseph von Galiläa, aus der Stadt Nazareth, nach Judäa in die Stadt der Familie Davids, nach Bethlehem. Denn er gehörte zur Familie und zum Stamme Davids. Und er ließ sich in die Listen des Kaisers mit Maria zusammen, seiner Verlobten, eintragen. Maria aber war schwanger. Als sie in Bethlehem waren, kam die Zeit für sie, zu gebären.

［A］と同様に Sperber-Polenz のドイツ語史に引用されているものである。63年版の „Womit wir leben können“ は入手出来ないから確かめるわけにはいかない。しかし Jörg Zink : Das Neue Testament 5. Aufl. 1969 Kreuz-Verlag Stuttgart • Berlin によれば上掲の一文は全く同じである。Zink のN.T.の初版は1965年らしい。同書の扉の裏には Zink の新訳の意図する所が7行にわたって表明されているが，Text については何も触れてない。Zink の訳し方は敷衍訳に近いものと言えそうである。

［D］ (Zink, Womit wir leben können, 12. Aufl., 1969)

Da wanderte auch Joseph von Galiläa, aus der Stadt Nazareth, nach Judäa in die Stadt der Familie Davids, nach Bethlehem. Denn er gehörte zur Familie und zum Stamme Davids. Und er ließ sich in die Listen des Kaisers mit Maria zusammen, seiner jungen Frau, eintragen. Maria aber war schwanger. Als sie in Bethlehem waren, kam die Zeit für sie, ihr Kind zur Welt zu bringen.

今日入手出来る Zink の „Womit....“ は 12. Aufl. 1969 Kreuz-Verlag Stuttgart • Berlin 本である。しかもそれは前出の［C］とは異る点がある。Zink-Bibel とも異っているのは益々厄介である。

（Ⅱ）Luther-Bibel :

［E］ (Luther-Bibel, 1909)

Da machte sich auf auch Joseph aus Galiläa, aus der Stadt Nazareth, in das jüdische Land zur Stadt Davids, die da heißt Bethlehem, darum daß er von dem Hause und Geschlechte Davids war, Auf daß er sich schätzen ließe mit Maria, seinem vertraueten Weibe, die war schwanger. Und als sie daselbst waren, kam die Zeit, daß sie gebären sollte.

„nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers“ とある所謂 Luther-Bibel 系統のものである。1909年版がたまたま目に触れたから引用するだけのこ

とである。発行所が Berlin の Britische und Ausländische Bibelgesellschaft であり Durchgesehene Ausgabe mit dem von den deutschen evangelischen Kirchenkonferenz genehmigten Text とあることが注意を惹く。

［F］ (Luther-Bibel, 1935)

Da machte sich auf auch Joseph aus Galiläa, aus der Stadt Nazareth, in das jüdische Land zur Stadt Davids, die da heißt Bethlehem, darum daß er von dem Hause und Geschlechte Davids war, auf daß er sich schätzen ließe mit Maria, seinem vertrauten Weibe, die war schwanger. Und als sie daselbst waren, kam die Zeit, da sie gebären sollte.

„nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers“ とあることは［E］と同じ。少し違うのは Neu durchgesehen nach dem vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text とあり発行所は Privileg. Württembergische Bibelanstalt Stuttgart である。35年版に深い意味があるわけではない。手元のものがそれであるだけのことだ。

［G］ (Luther-Bibel, 1956)

Da machte sich auf auch Joseph aus Galiläa, aus der Stadt Nazareth, in das jüdische Land zur Stadt Davids, die da heißt Bethlehem, darum daß er von dem Hause und Geschlechte Davids war, auf daß er sich schätzen ließe mit Maria, seinem vertrauten Weibe, die war schwanger. Und als sie daselbst waren, kam die Zeit, daß sie gebären sollte.

hergestellt 1968 とある聖書，しかしN．T．は1956年に，A．T．は1965年に改訂されている revidierter Text であるから引用は1956とした。„nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers“ となって［E］，［F］とは一寸異っている。

［E］，［F］，［G］とも殆ど同一であるがほんの僅かだが違っている所もある。殊に最後の箇所で die Zeit を受けて09年版は daß，35年版は da，56年版は daß

となっているのが考えさせられる所である。

(Ⅲ) 宗派の異るもの：

[H] (Zürcher Bibel, 1942)

Aber auch Joseph ging von Galiläa aus der Stadt Nazareth hinauf nach Judäa in die Stadt Davids, welche Bethlehem heisst, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids war, um sich mit Maria, seiner Verlobten, die schwanger war, einschätzen zu lassen. Es begab sich aber, während sie dort waren, da vollendeten sich die Tage, dass sie gebären sollte.

扉の裏に1942 Verlag der Zwingli-Bibel Zürich とあるのでその年号を入れたが，同じ所に Diese Zürcher Bibel, die auf die Reformation Zwinglis zurückgeht, wurde in den Jahren 1907 bis 1931 im Auftrag der Kirchensynode nach dem Grundtext aufs neue übersetzt. Ihr Herausgeber ist der Kirchenrat des Kantons Zürich. とある。

[J] (Franz Sigge, Das Neue Testament, 1958)

Es ging aber auch Joseph hinauf von Galiläa aus der Stadt Nazareth nach Judäa in die Stadt Davids, die Bethlehem heißt, weil er aus Davids Haus und Geschlecht war, um sich mit Mariam aufnehmen zu lassen, dem ihm anverlobten Weibe, die schwanger war. Als die nun dort waren, begab es sich, daß sich die Tage erfüllten, da sie gebären sollte.

Fischer-Bücherei の der 200. Band である。底本は Novum Testamentum Graece von Prof. Heinrich Vogels と断ってあり，Imprimatur の語が明示されている。

［K］(Stuttgarter Kepplerbibel, 1915 ; neu bearbeitet von Peter Ketter 1950)

Auch Joseph reiste von Galiläa aus der Stadt Nazareth hinauf nach Judäa in die Stadt Davids, die Bethlehem heißt, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids war, um sich mit Maria, der ihm verlobten Frau, die guter Hoffnung war, aufschreiben zu lassen. Es geschah aber, während sie dort waren, kam für sie die Zeit ihrer Niederkunft.

扉に Das Neue Testament/Stuttgarter Kepplerbibel とあり 1967年 Verlag Kepplerhaus Stuttgart の発行である。序文を見ると Paul Wilhelm von Keppler が1915年に初版を出し，1950年に Peter Ketter が手を入れて Neuauflage を出版している。又，その間1936年にも新版が出され，その際底本に用いたものは die neueste Ausgabe des Novum Testamentum graece et. latine von P. Aug. Merk S. J., Rom 1935 であるむねが断ってある。Imprimatur の語が明示されている。

［L］(Rießler-Storr-Bibel, 1934, 11. Aufl., 1961)

Auch Joseph reiste von Galiläa aus der Stadt Nazareth nach Judäa zur Davidstadt mit Namen Bethlehem, um sich eintragen zu lassen, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids war. Mit ihm ging Maria, sein anverlobtes Weib, das guter Hoffnung war. Während sie dort verweilten, kam für sie die Zeit der Niederkunft.

1961年の 11. Aufl. は今参照出来ないので 7. Aufl. 1954 を利用する。扉には Die Heilige Schrift des Alten und des Neuen Bundes / übersetzt von Paul Rießler und Rupert Storr とあり発行所は Matthias-Grünewald-Verlag Mainz である。Rießler が旧約の部分を Storr が新約の部分を訳している。序文から推測すると Rießler-Bibel に Storr-Bibel が加えられて Ein-Band-Ausgabe となったのは1934年であるらしい。Storr は auf Grund des griechischen Textes von A. Merk S. J. と断ってある。Imprimatur の語が明示してある。

[M] (Jerusalemer Bibel, 1966)

Auch Joseph zog von Galiläa aus der Stadt Nazaret hinauf nach Judäa in die Stadt Davids, die Betlehem heißt, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids war, um sich mit Maria, seiner Verlobten, die schwanger war, eintragen zu lassen. Während sie dort waren, begab es sich aber, daß sich die Tage vollendeten, da sie gebären sollte.

Verlag Herder K G Freiburg im Breisgau 1966年の出版である。im Abstimmung der Jerusalemer Bibel と Text については断ってあるから簡単に Jerusalemer Bibel の独訳とは言えないのかも知れないが便宜上かく名称する。Imprimatur の語が明示してある。

(Ⅳ) その他の自由訳：

[N] (Albrecht-Testament, 1920 ; 9. Aufl., 1962)

Auch Josef zog damals aus der Stadt Nazaret in Galiläa hinauf nach Judäa zu der Davidstadt mit Namen Bethlehem, weil er zu Davids Haus und Geschlecht gehörte, um sich dort eintragen zu lassen mit Maria, seiner Ehefrau, die guter Hoffnung war. Während sie dort weilten, kam für Maria die Stunde ihrer Niederkunft :

Brunnen-Verlag • Gießen und Basel の出版。扉に „in die Sprache der Gegenwart übersetzt und kurz erläutert von Ludwig Albrecht“ とある。1920年の初版の序を見るとギリシア語の原典を „in klarem, gemeinverständlichem Deutsch, in einem Deutsch, wie es heute gesprochen und überall verstanden wird“ に移すことを目指したとある。その原典は1926年の 5. Aufl. の序で見ると Hermann Freiherr von Soden による griech. N. T. が中心である。

[P] (Hans Bruns, Die Bibel, 1969)

So machte sich auch Joseph von Galiläa aus der Stadt Nazareth auf, um nach Judäa in die Stadt Davids zu wandern, die Bethlehem heißt, weil er zur Familie und zum Geschlecht Davids gehörte. Auch er wollte sich mit Maria, seiner Anvertrauten, eintragen lassen. Sie war guter Hoffnung. Während ihres Aufenthaltes dort kam die Stunde der Geburt,

Brunnen-Verlag Gießen/Basel の出版で 4. Aufl. 1969 である。初版は何年であるか不明であるが4版の序文には „Bei dieser Auflage wurde das Alte Testament neu durchgesehen und an vielen Stellen verbessert, nachdem schon im Jahr 1965 das Neue Testament völlig neu gesetzt worden war" とある。現代語訳でドイツでは好評とのこと。

[Q] (Gute Nachrichten für Sie, N T 68, 1968)

Auch Joseph wanderte von Nazareth in Galiläa nach Bethlehem in Judäa, dem Geburtsort von König David. Er mußte dorthin, weil er von David abstammte. Er nahm seine Frau Maria mit, die ein Kind erwartete. Während des Aufenthalts in Bethlehem kam für Maria die Zeit der Entbindung.

Good News for Modern Man の独訳で発行所は Württembergische Bibelanstalt Stuttgart ; 1. Aufl. 1967, 2. Aufl. 1968 である。

[R] (Die Heilige Schrift/Miniaturbibel)

Es ging aber auch Joseph von Galiläa, aus der Stadt Nazareth, hinauf nach Judäa, in die Stadt Davids, welche Bethlehem heißt, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids war ; daß er mit Maria seiner Verlobten sich einschreiben ließe, welche schwanger war. Es begab sich aber, während sie daselbst waren, wurden die Tage erfüllt, daß sie gebären sollte.

扉に上掲の見出しと同じものがタイトルに使われ，ついで„Nach dem Urtext und mit Berücksichtigung der besten Übersetzungen/herausgegeben von/ Franz Eugen Schlachter Neu bearbeitet von/K. Linder und E. Kappeler“ としてあるが出版年は不明。しかし入手したのは新本としてである。年月に関して序文から読み取れることは Schlachter が 1911年に Bern で世を去ったことだけ。

出版元は Privileg. Württ. Bibelansatlt • Stuttgart であるからそれなりのもと考えられるが現代語訳の一例として加える。

［S］(Curt Stage, Das Neue Testament, 1896)

Auch Joseph machte sich auf von Galiläa her aus der Stadt Nazareth nach Judäa in Davids Geburtsort, der Bethlehem heißt, weil er aus dem Hause und Geschlechte Davids stammte, um sich eintragen zu lassen mit seiner Verlobten Maria, die guter Hoffnung war. Als sie dort waren, kam die Zeit ihrer Niederkunft,

扉には „übersetzt in die Sprache der Gegenwart von“ とあるが，序文を見ると1896年のことである。そこに興味が持たれる。底本は Westcot u. Hort (Cambridge u. London 1881) によるものと断ってある。出版元は Verlag von Philipp Reclam jun. Leipzig，即ち古いレクラム文庫の一冊である。

次に掲げるものは Polenz の Textproben で示されている Martin Luther 1522年訳と von Zinzendorf 1739年訳とである。

［Y］Frühneuhochdeutsch (Martin Luther, 1522)：

Da macht sich auff, auch Joseph von Gallilea, aus der stadt Nazareth, ynn das Judisch land, zur stad Dauid, die da heyst Bethlehem, darumb, das er von dem hauße vnd geschlecht Dauid war, auff das er sich schetzen ließe mit Maria seynem vertraweten weybe, die gieng schwanger. Vnnd es begab sich, ynn dem sie daselbst waren, kam die zeyt das sie geperen sollte.

[Z] Neuhochdeutsch, 18. Jh. (Nikolaus Ludwig Graf v. Zinzendorf, 1739):

Da machte sich aber auch Joseph auf, von Galiläa, aus der stadt Nazareth, in Judäa, in die stadt Davids, die Bethlehem heisset, weil er aus dem hause und familie Davids war, auf daß er sich aufschreiben liesse mit seiner braut Maria, die empfangen hatte. Und als sie daselbst waren, kam die zeit, daß sie gebähren solte.

以上の資料から何を読み取ることが出来るかについては今は何も言うことが出来ない。ただ，ヨゼフがマリヤと共にナザレからベツレヘムに行きそこに滞在しているうちにマリヤは産気づいた，という極めて簡単な事柄を複雑にしているものは，二つの地名がどういう由緒のある所なのか，又，何故二人は都に上ったのか，又，ヨゼフとマリヤとはどういう人物でどういう間柄にあったのか等々の何れも重要なしかし附帯的な事柄が巧みにからみ合わされているからであって，それが自ら多種多様な表現と構文とを生み出す原因となっているである。Polenz がルカ伝の2章4—6節を比較の例文として選び出した理由もまさにそこにあるわけなのであろう。ドイツ語の表現の多様性について改めて感じさせられるものがここには潜んでいるのだ。　　（昭和45年11月記）